

23【街の散策からの気づき発見】

早春の梅と越ヶ谷花田苑

会員 K.T.

梅まつりの話題が聞こえてくる。『ウメ』は植物種の分類では、『サクラ』『モモ』『アンズ』の仲間になる。環境学習その7で学んだ「生物多様性を考える」を紐解くと、

“種”とは、人類が生物を分類した際に、生物の種類分けの最も基本的な単位。生物種分類は上位から順に：界(かい)⇒門(もん)⇒綱(こう)⇒目(もく)⇒科(か)⇒属(ぞく)⇒種(しゅ)と分類されている。「ウメ」の分類をみると、梅はバラ科になり、「植物界⇒被子植物門⇒双子葉植物綱⇒バラ目⇒バラ科⇒サクラ属⇒スモモ亜属ウメ種」となる。蠟梅は、クスノキ目⇒ロウバイ科⇒ロウバイ属になり、梅とは異なる種類になる。

梅の歴史は古い、諸説あるも梅が伝来したのは、3世紀の終わり頃、百済からの帰化人王仁(わに)がもたらしたとする説、大和時代(250年～710年)の欽明天皇(在位 531年～571年)の頃、中国・呉の高僧がもたらしたという説がある。現存する日本最古の歌集、759年～780年頃に、成立したといわれる「万葉集」には梅を詠んだ歌が119首ある。

春されば まず咲くやどの 梅の花 独り見つ 春日暮さむ
(筑前守山上大夫)

天平2年(730年)正月13日、大伴旅人の太宰府の邸宅での宴会で詠まれた32首のうちの山上憶良の歌だという。

古来花見といえば梅であった。花見がサクラになったのは江戸時代以降のようだ。梅の呼び方は平安時代以降、「ウメ」・「ムメ」とも呼ばれ、江戸時代に本居宣長と上田秋成が梅を「ウメ」と書くか、「ムメ」と書くか、音韻論争が行われたという。与謝野蕪村も論争の余波を受けたのだろう。

うめさきぬ どれがむめやら うめじゃやら (蕪村)

この句には、蕪村の前置きがある。「あらむつかしの仮名遣いやな、字義に害あらずんば、アアままよ。」蕪村さんは、意味が損なわれなければ、どちらでもいいではないか、ということらしい。梅は春の季語、寒梅は冬の季語になるようだ。「寒梅や奈良の墨屋があるじ顔 (蕪村)」。梅は冬と春をつなぐ花といえる。

また、生きな江戸っ子衆がお座敷で楽しんだ“梅”にまつわる端唄がある。こちらは少しいろいろっぽい。

♪梅は咲いたか 桜はまだかいな

柳やなよなよ風次第、山吹や浮気で色ばかり、 ションがいな ♪♪(後略)

花柳界のおネエさんたちを暗示したもので、「梅」の花は若い芸妓、「桜」は少し上のお姉さん、「柳」と「山吹」はその上の姐さん達を暗示、柳は風に逆らわず巧みに受け流す、山吹は実がならないので、あきらめる、「ションがいな」は軽い合いの手、「それからどうした」と、世の中の人の心事を花や木等にたくし、唄っている。現代人の私どもも「梅が咲くと、サクラはまだか、」と春を待つ、ワクワク感がでてくる。巷では、「花より団子」と、いったところから一部の人々を除き、大部分の人は和歌や俳句、端唄を詠う文化レベルは乏しい。

科学が進歩し、文明的なレベルは高くなったが、花を愛で、自然を楽しむ文化的なレベルでは、後退したのかもしれない。ともかくも、早春を告げる梅を見たくなり、立春の午後、越谷市の「花田苑」へいった。まだ寒い中ではあるも、日当たりのいいところは紅梅が咲き始めていた。椿は最後の盛りを見せている。

苑内で働いている植木屋さんに見ごろを聞くと、『今年は少し早くなりそうですね。年々早くなっていますよ』、とのことだ。ここにも温暖化の影響が出てきているようだ。



越ヶ谷市花田苑

苑内の日本庭園

蠟梅 / 椿

紅梅 / 竹林